

「神のみこころなら」 一使徒行伝講解説教 41-

使徒行伝 18章 12節～23節

説 教 本庄侑子牧師

パウロの第2回伝道旅行が終わりを迎えます。ここで印象的な言葉が語られます。「神のみこころなら、またあなたがたのところに帰ってこよう。」(21節)念願のエペソにいる時でした。人々もパウロが長くいることを望んでいました。しかし、パウロの口から出たのは、神様が願っておられるなら、また帰ってくるでしょうという言葉でした。様々な出来事を経て、パウロの内に、自分や人の思いではなく、神様の御心がなりますように、私はそれに従います、と心から言い得る信仰が育まれていました。

人との関係を築くには時間が必要ですが、それは神との関係についても言えます。あの時はなぜ？と思ったけれど、神様は最善を尽くしてくださった、と受け入れるには、年月が必要な時があります。この時のパウロも年月を経て、自分や人の思いへの執着は取り除かれ、「神の御心なら」と一切を神様に委ねて、その出来事を受け取る者へと変えられていました。

第2回伝道旅行は、出発から思いがけないことの連続でした。恩人バルナバとの決別。これからの旅にこれ以上ないような同行者シラス、生涯にわたっての愛弟子となるテモテとの出会い。結果的に、パウロとバルナバが別の道を通って行ったことで、神の言葉は、より広く宣べ伝えられることとなりました。

また、エペソへの途上、道がことごとく塞がれて、追いやられたのは港町トロアス。そこで天からの幻に目が開かれて、海向こうのマケドニアに渡って行きました。そこでは、洗礼を受ける人たちが起こされ、伝道の拠点となる家と、指導者も与えられました。しかし、これからという時に激しい迫害が起き、生まれたばかりの教会を残して町を去らなければなりません。そうして追いやられた先で、また主を信じる人たちが起こされていきました。これら一連の出来事を通して、神様の導きの確かさに、ひれ伏す思いとなっていたことでしょう。

今日の箇所では、パウロはユダヤ人に襲われ、地方総督ガリオに告発されてしまいました。「恐れるな、あなたには私がついていく。誰もあなたをおそって、危害を加えるようなことはない。」と、神様からの力強い励ましを受けた後だけに、ことさらこたえたのではないかと思います。

しかし、パウロが口を開く前にガリオが訴え

を退け、パウロはユダヤ人たちの攻撃から守られました。その後、会堂司ソステネが群衆に殴られたという出来事が記されています。ソステネの名前は、コリント人への手紙一の1章1節に、パウロと共同の手紙発信人として出ています。「神の御旨により召されてキリスト・イエスの使徒となったパウロと、兄弟ソステネから、コリントにある神の教会へ」

この御言葉から、こう想像します。ガリオがユダヤ人たちの訴えを退けたことで、ユダヤ人たちへの敵意を強くしたキリスト者たちがソステネを殴り、それをパウロが助けた。感動したソステネは主イエスを信じ、パウロと共に伝道する者となった。ここにも神様の導きがあり、パウロは、自分の思いをはるかに超えた主の御心に圧倒されていたのではないのでしょうか。

「パウロは、かねてから、ある誓願を立てていたので、ケンクレヤで頭をそった。」(18節)「誓願」はユダヤ人の儀式で、一定期間、髪を切らず神様に自分を献げます。パウロがどのようなことを願い、誓っていたのか。それはエペソで長く過ごさずに先を急いだことと関係があると思います。この後、パウロは、送り出されたアンテオケに帰る途中、遠回りをして、わざわざエルサレムに立ち寄っています。エルサレムには、かつて迫害をしていたパウロが、伝道者となって来た時、人々が受け入れられずに追い出した、あの教会がありました。

ユダヤ人以外の異邦人にも救いが及んで行く時代にあって、パウロは、エルサレム教会のことを心にかけ、神様に誓願を立てた。祈りのうちに神様の御心を問い、今がその時だとの導きを得たので、エペソで念願がかない、どんなに人に求められても長くいることはなく、主への切なる祈りと共にエルサレムに向かったのです。またそこで追い出されたとしても、パウロの胸の内には、あの言葉が満ちていたことでしょう。「神の御心なら」。うまくいかないことも、全て神様に委ねて歩いていったのです。

この時、パウロに働かれた神様が、今朝も私たちと共にいてくださいます。祈りつつ、神の御心に身を委ねる信仰の旅路を、共に続けていきましょう。

(記 説教要約奉仕者)